

わだ
Wa☆Daフォトギャラリー 1,000 万アクセス突破記念
デジタル写真家和田義男「ロマンと感動の旅」を語る

平成21年7月4日
於コートヤード・マリオット銀座東武ホテル

うっ にん
「世界を撮す遊び人」講演録

皆さん、今晚は。ずいぶん遠くから色々な方に集まっていたいただきまして、こんなに皆さんが来られるとは思っていませんでした。本当に嬉しく思っております。

今日は、石川辰夫さんの過大な評価で少し恥ずかしく思っておりますけれども、インターネットのバーチャルな世界でやっておりましたのを、実際にお目にかかって講演をするということで、「Wa☆Daフォトギャラリー」で初めてのオフ会になります。

6月2日に原田とおるさんの「八ヶ岳野辺山高原の四季」という作品を発表しましてから一月たちました。その間、皆さんに恥ずかしくないようにということで一生懸命編集しまして、今日は、電子紙芝居を440枚つくってまいりました。第1部が200枚ほど、第2部が2百数十枚で、1時間ずつでは足りないのではないかというくらい、あれもこれも入れております。そういうことで、余り挨拶を長くしてもなんですので、早速始めさせていただきます。

インターネットで申し込まれてこういう場に皆さん集まっていたいただいているわけですが、ここに来られている方の共通は、元気であるということです。色々なところで活躍されておられる方が来られている。インターネットだからといって部屋に閉じ籠もっているわけではなくて、インターネットも楽しみながらあちこち楽しんでおられる方ばかりでございますので、そういう方のために編集させていただきました。

『プロジェクターを使用した電子紙芝居』

【第1部 世界の旅】

それでは、「第1部 世界の旅」ということで始めます。

《はじめに》

今回の講演は「世界を撮す遊び人」というテーマにさせていただきました。これは私だけのことでなくて、今日お集まりの皆さんのことでもあるというつもりでこのテーマにさせていただいたわけでございます。

後白河法皇という方が800年ほど前の平安末期におられましたけれども、「梁塵秘抄」というものを編纂されておられます。この中で、「遊びをせんとや生れけむ 戯れせんとや生れけん」という有名な言葉があります。この法皇様は、「人は遊んだり戯れたりするために生まれてきた」というふうに言われたわけで、日本人の遊び心というのは、生まれたときからあるということでございます。これは、子供のように熱中できる楽し

みであり、人生に喜びと彩りをもたらすものということで、まさに道楽の根本にあるものだと思います。

夏目漱石という方がかなり講演会を開催されております。そこで色々な話がありまして、私もその講演録を読んでいるのですけれども、夏目漱石は、仕事も余暇も道楽でやるのが一番いいんだというふうにおっしゃっているんです。私もその通りだなと思うのですが、残念ながら、私は、仕事は道楽ではできなかったのですけれども、今度は余暇で何とか道楽を極めてみたいということで色々と考えました。

《^{わだ}Wa☆Daフォトギャラリーの誕生まで》

「^{わだ}Wa☆Daフォトギャラリー」を始めるまでに構想2年、色々考えたのです。今は江戸時代と違って、科学技術が発達していますし、高度情報化社会ということで、ジェット機とデジカメとパソコンにインターネット、この4つを融合しました。結局、旅行であり、写真であり、それをパソコンで編集してインターネットで発表する、これだけならできるのではないかなと思いつきまして、世界中を旅してロマンと感動を切り取ってくる、誰もこういうホームページをやっていないのですね。これだなと気がつくまで2年かかりました。そこで、「^{わだ}Wa☆Daフォトギャラリー」とし、ドメイン（URL）は最終的に「^{わだふおと・どっと・じゅーびー}wadaphoto.jp」ということにしました。

《^{わだ}Wa☆Daフォトギャラリーとは？ 1/2》

「^{わだ}Wa☆Daフォトギャラリー」は、今年の7月でちょうど9年になります。累計が1,070万アクセス、1日に1万件のアクセスがありまして、世界44カ国、390作品、1,450頁、高精細の大きな画像が12,500枚あります。多分、個人で「質、量、人気」日本一の写真サイトになったというふうに思います。検索しても私以上のものが出てきませんので、多分日本一ではないかと勝手に思っております。

ちなみに、Google（グーグル）でフォトギャラリーを検索しますと、751万件ヒットしまして、その中のトップが「^{わだ}Wa☆Daフォトギャラリー」です。ですから、日本一というのも嘘ではないのではないかというふうに思っております。ちなみに、オリンパスさんは4番目、キャノンがもっと下。（笑声）これは日によって、ちょっと上がったたり下がったりするのです。私は、実は一番のときにこれをコピーしたのでちょっとインチキなところがありますが、少なくとも個人のサイトでトップ。しかも、オリンパスさんだとかキャノンだとか超一流の会社のフォトギャラリーと競っているというのにはあり得ないことです。自慢して申し訳ないのですけれども、これがインターネットの世界だなというふうに思います。

とにかく、頼んでもいないのに勝手に検索して宣伝してくれるのです。今画像検索ができますから、1万何千枚の中からぱっと出てきて、これを使わせてくれという形で出版社だとかテレビ局とか色々なところからメールが来ます。だから、お金を一銭もかけずにPRできるのです。インターネットは個人も企業も平等だし、とにかく人気順に並ぶわけです。多分、ヒットしても10頁目、100頁目とかいったら、そんな後ろの方は誰も見ませんね。ですから、ないに等しいということで、有名であれば物すごくどんどん広まるのですけれども、駄目なところは全然見てもらえないという厳しい実力本位の

社会がインターネットだというふうに思われます。

《Wa☆Da^{わだ}フォトギャラリーとは？ 2/2》

まず、コンセプト（テーマ）が「ロマンと感動！世界の旅の写真館」ですので、何でもありということです。美しい高精細画像を多用して旅や祭の醍醐味を再現するということで、こんな大きな画像を張りつけているのは私以外にいないですね。皆さん何かちっちゃな画像だったり、コピーされないように画像の中にちょっと字を書いたりというケチな方が多いんですけども、私はそんなケチなことはしない。皆さんに使ってもらえば幸せだと思っております。

それから、写真だけではなくて、図だとか表だとか音楽、文章、俳句、何でもかんでもマルチメディアを駆使して作品をつくるということで、これも余りやっておられないんです。人がやってないことをやるというのが気持ちがいいし、面白い、楽しいということでどんどんはまってきたわけであります。

私一人が1年間に1、2回海外旅行しても大したことは出来ませんが、今までに何と36人が仲間になりました。37人目の方が写真も送っていただいて準備中なんです。どんどん増えていくと思います。世界中を回られて、その方が撮られた感動の写真をただで原画をいただいて、編集は私一人でやりますから、同じクオリティで、あたかも私が全部行ったのではないかと思われるくらいになっています。新作を見てもどれも同じ編集ですので安心して見られる。特派員みたいな仲間からどんどん送っていただけるので、バラエティ豊かで、これだけすごい量になりました。

「Wa☆Daフォトギャラリー」が始まってすぐに「感動写真集」を始めまして、それが良かった。アマチュア山岳写真家の南光優さんという方と神戸で知り合ったのですが、その方がホームページをやっておられなかったものですから、「では、私のホームページで発表させて下さい」ということで写真を提供いただきまして、「感動写真集」と勝手に名前をつけて発表したのが初めなんです。それがなかったらこんなにバラエティ豊かなものはできなかつたと思っております。一人でコツコツやるということではなくて、同好の士が増えてこんなに広まったのではないかと思います。今日は、その方々も多数来られていますので、その作品も紹介させていただきたいと思っております。

個人、ボランティア、公共、福祉、教育関係は、全部無料にしました。私の写真を使って金儲けをする出版社とかの商用利用はちょっと分け前をいただいて、といっても市価の十分の一とか五分の一の安い値段ですけども、それを取材だとかホームページの維持管理費に使わせていただいております。

それから、「お便りコーナー」とか「徒然日記」とか「投稿写真集」とかどんどん増やしまして、交流の場になり、毎日、楽しみにのぞかれています方もいらっしゃるようでございます。

最後は、写真俳句集の「俳句・海の風景」。最初は海だったのですが、種が尽きましたので、今は名前だけ「海」が入っておりますけれども、1,050句になりました。しかも、英訳を全部つけております。そうやっているのは私だけです。芥川龍之介が1,000句ですから、数だけは同じになったのですが、家内からは中身が愚作で数だけ云ったって自慢にならないと言われておりますが、（笑声）とにかくコツコツとやってきたことがよかったなと思っておりますし、俳句をやることによって短く簡潔明瞭に説明ができ

るようになったので、続けてきて良かったと思っております。

《^{わだ}Wa☆Daフォトギャラリー9年の歩み》

現在、満9歳になるわけですけれども、2000年の7月16日にフランス編、たった12枚を張りつけて「Wa☆Daフォトギャラリー」を発表しました。今、アクセスが1日に1万件なんですけれども、最初は、1万件に達するのに11ヶ月かかっています。それから100万件になるまで、1ヶ月で1万件くらいになり、20日で1万件、10日で1万件、5日で1万件というふうが増えてまいりました。

一番最初のものを残しておけばよかったなと思うのですけれども、フランス編のものはどこかへ消えてしましましてわかりません。探すと、一番古いので2003年が残っていました。これは今のとほとんど変わらないような形です。1日617件ですから、今では単品の作品がそれくらいになったりしますので、本当に少なかったんです。

「感動写真集」も、さっき言いました南光優さんのシリーズから始まりまして、まだこの段階では大庭靖雄さんの屋久島の第20集が出たところです。その後、500万件から1日1万件というペースになり、お陰様で今年の4月10日に1千万件になりました。

これは最新のトップページの状況です。「感動写真集」もずっと南光優さんの写真を出させていただいております。新作はモンブラン、沖本陽子さんの作品です。今日はそちらの方も御紹介させていただきますけれども、一番新しいのは「八ヶ岳野辺山高原の四季」、原田とおるさんの作品です。ということで123集を数えました。これからもどんどん増やしていきたいと思っております。

《^{わだ}Wa☆Daフォトギャラリーの人気の秘密は?》

「Wa☆Daフォトギャラリー」の人気の秘密を自分で勝手に分析してみました。実際に旅や祭に参加した気分が味わえる、幅広いジャンルの写真が大量にある。ないのは女性のヌード写真だけ（笑声）ということで、これだけは家内から後ろでのぞかれていますので、ちょっとそういう写真が出るとクレームが入りまして編集もできないということでやめております。それから、好きなときに好きなだけ無料で楽しめるということで。それから、高画質写真を自由に個人で利用できる、話題が豊富で解説が正確なのでためになる、CD並の美しい音楽が楽しめるということで、勝手に自画自賛しておりますけれども、こんなところじゃないかなというふうに分析しております。この写真は、原田とおるさんの素晴らしい写真をお借りしました。

《^{わだ}Wa☆Daフォトギャラリー奮闘記 上》

ちょっとした話題ですが、奮闘記ということで御紹介します。最初は嬉しいものですが、採用されますとすぐに「徒然日記」に載せるものですから沢山あります。今は余り感動しなくなったので、雑誌とかに載ってもほとんど発表していません。

最初は、札幌大学のオーケストラの音楽が発売されるということで、そのジャケットに、モスクワに行ったときの写真がいいということで無料で提供させていただきました。ここに和田義男という名前を入れていただいています。

それから「ワイン王国」という雑誌で、これはフランスです、ポン・デュ・ガール（水道橋）だとかを採用してもらっています。「日本史」なんかでも、これは姫路のお祭で

す。白黒ですけれども、かなり大きく載せてもらっております。TBSの子供さん向けのインターネットのリンクです。ベニスの作品がいいということでリンクをいただいております。百科事典にも載りまして、「ポプラディア」という小学生用の百科事典ですけれども、ポンペイの遺跡で載せてもらいました。

本格的な写真集というのは、神田倶楽部の「400年目の江戸祭禮」です。これは2003年に、徳川幕府が開かれてから400年目になるということで、東京で記念の行事がありました。そのときに、その行事を記録に残したいということで神田倶楽部の方がつづいたのです。会長の田畑秀二さんが私の写真を見られて依頼されたもので、お祭を主催したのだけれども、記録写真を撮っていなかったのですね。私がちょうどまく撮影して発表したものですから、全部使わせてほしいということで、無料ですべて提供させてもらいました。有料で売っているのですけれども、皆さん手弁当でつづいた記念の愛蔵版で、これがA4ですから、開いたらA3になる非常に大きな本ですが、これだけ大きな写真を出版できたというのは初めてなので非常に嬉しかったです。

それから、警察の防犯協会の「KOBAN」に、2006年の冬にちばあきおさんが撮った作品、西大寺会陽が載りました。もちろん、これも無償で提供させてもらっています。西大寺、すごいお祭ですね。それから、宝木を取った林グループの写真ですけれども、これも採用になっております。

それから、アフィリエイト広告です。広告を載せるのはちょっとはしたないなと思ったのですけれども、皆さんお金が儲かるということなので、考えまして、私も載せようということで始めたのがJTBSさんです。そのほかに「じゃらん」、「楽天トラベル」、「トップツアー」、「地球の歩き方」ということで、一流の会社のバナー広告を出すことにしました。特に、「楽天」からは、「Wa☆Daフォトギャラリー」にぜひ載せてくれないかという連絡がありまして、非常に嬉しかったです。もう大分売れているころでしたので、逆に向こうからお誘いがあったということです。

バナー広告を載せるには、申し込みましても、向こうが審査するのですね。それでOKが出ないとバナーが働かないような仕組みなんです。それで、私が載せたいというのは全部OKでしたし、向こうからも依頼が来るということなので、これも嬉しかったですね。皆さんクリックしていただきますと月々お金が入りますので、「Wa☆Daフォトギャラリー」にアクセスされたら、見なくてもいいですから、必ずクリックだけ何回かしていただきますと…。(笑声) お陰様で、レンタルサーバーを借りているのですけれども、年間で5、6万円かかるのですが、これがバナー広告で全部出ます。ですから、お金がかからなくてインターネットができる、ホームページができるということで非常にありがたく思っております。また、格調が下がるのではないかと思いましたが、JTBSとか大手のバナーなので、逆に格調が上がったのではないかなと思っております。やってよかったなと思います。

地下鉄の「メトロ」です。これは鐵砲洲稻荷神社の寒中水浴です。私の写真を使わせてくれという連絡がありまして提供したものです。51回目の写真を掲載しております。

それから、2007年には青梅大祭、私の地元なんですけれども、ずっと取材しまして、こういうふうには3年間私の写真がポスターになっております。

《Wa☆Daフォトギャラリー奮闘記 下》

2008年になりますと、黒石寺蘇民祭こくせきじそみんさいのセクハラポスター事件、こういうひげかたの方が、どこがセクハラなのかよくわからないのですけれども、JR東日本さんがこれを駅構内に張るのは駄目だと拒否したということがテレビ局に取り上げられて広がったんです。こちら平成18年はモデルが長谷川昇司さんになっていますけれども、そんなにトーンは変わらないのですが、ひげもじゃが何かセクハラだということだったようです。私はこの前に既に蘇民祭を取材して発表していたものですから、そのあおりを食いまして、1日に16,693件ですか、アクセスが集中してパンクしました。それで、サーバー会社が、他の人のサイトがアクセスできなくなるからということで制限をかけたのです。かなり大変な目に遭っております。この話はまた後でさせていただきます。

尾白鷺おしろわしの写真がクレトイシの新製品のイメージキャラクターになりました。EAGLON（イーグロン）という砥石なんです。呉の吉浦にある会社が業界の一番、二番というそんなすごい会社だとは思わなかったのですけれども、担当者が東京まで来られまして、ぜひ新製品のキャラクターとして使いたいというんです。これは上平明かみひらさんの「流水の尾白鷺」。これは望遠じゃなくて目の前で撮った写真なんです。こんな凄い写真は誰も絶対に撮れないと思いますけれども、この写真が新製品のイメージキャラクターとして採用されました。非常に嬉しく思っております。

去年は、秋にオリンパスプラザで写真展を開かせていただきました。今日、オリンパスの若松誠一さんに来ていただいておりますけれども、若松さんから個展を開かないかとお声をかけていただきまして、インターネットだけでなく、実際に写真をプリントしてやったらどんなふうになるのかということで私も挑戦しまして、立派な部屋をお借りしてやりました。石川辰夫さんに駆けつけていただきまして、本当に感謝しています。沖本さんもうありがとうございます。東京は2週間やりまして、それから大阪の方も12月に1週間、こういう建物の広い部屋で開催させていただきました。

「水の祭り」です。これは首都圏のお祭600くらいをカレンダーとかにして発表している雑誌なんですけれども、この「水の祭り」のトップに鐵砲洲の寒中水浴大会が取り上げられました。私の写真を使わせてくれということで、52回目の大会の写真が採用されています。ちなみに、二番目が鹿島神宮の禊です。これも私の写真ですけれども、人数は100人ぐらいで規模は大きいのですが、鐵砲洲が一番にランクされております。

それから、この間、写真が切手になりました。ふるさとの祭です。毎年1集ずつということで、今年が2集目、まだ始まったばかりのシリーズですけれども、多分八幡はちまんさんの祭ということなんでしょう。こちらは郡上八幡ぐじょうはちまんの郡上踊り、それから深川八幡祭、この2種類の切手が8月10日に出版。出席者のお土産に差し上げようと思ったのですけれども、ちょっと間に合わなかったので発表だけになりましたが、この写真が「Wa☆Daフォトギャラリー」から採用されました。切り絵の先生が2種類の写真をモチーフとしてつくられたということで、左側の写真は志村清貴さんが撮られた「わっしょい！深川祭」に載っております写真です。これもそのまま、首の傾き方も全く同じで、この写真が切手になったということです。

右の方は、私の写真ですけれども、何かあちこち継ぎ合わせているので、ちょっとよくわかりません。この辺が何か似ているなということなんですけれども、この2枚が採用されました。

いよいよ7月になりまして、講演会兼オフ会ということで大きなイベントが本日行われているわけですが、石川さんが言われましたように準備期間が10ヶ月です。とにかくやろうというのが去年の10月22日に決まりまして、それから打ち合わせをしたりキックオフ会、さらにミーティングなどを重ねまして、4月に1千万件を達成した後、3回目の検討会、それから事前準備があつて本日の講演に至りました。準備委員会の皆さんがここまで準備するのは本当に大変だったと思われませんが、無事、開演出来ましたことを有り難く思っております。

《デジタル写真は写真でない？》

駆け足で見てまいりましたけれども、これから写真を始めたいと言われる方もおられますので、デジタル写真家と勝手にひょうぼう標榜しておりますので、写真のことだけ4、5分ほど話したいと思います。

本を読んでおりましたら、デジタル写真は写真じゃないという本がありました。「デジグラフィ」という名前で2004年に発行されました。私は2000年からやっていますから、2004年といったらインターネットでばんばんやっている時なんですから、飯沢耕太郎さんという方は、日大芸術学部写真学科を出られて30年間写真評論家として色々な本を書いておられます。インターネットでデジタル写真がだんだんはやってきたときに、この方は「デジタルは写真を殺すのか？」ということを書いていまして、「フォトグラフィ」が写真なんですけれども、デジタル写真は「フォトグラフィ」じゃなくて、「デジグラフィ」だというふうに勝手に命名しましたが、結局、はやりませんでした。デジグラフィなんて聞いたことないです。要するに、「写真のように緻密に描かれた絵は写真ではないのと同じように、デジタル写真は非物質的なデータに過ぎず、写真ではない」という変なことを書いておりました。

その後、2007年に、私はこれは岩波新書で読みましたけれども、「写真を愉しむ」というのが出ました。その中で、自分は間違っていたということを反省しておられるようです。この方は、デジタル写真でプリントしたのも、印画紙で焼いたのも見分けがつかなくなっています。デジタル写真は写真じゃないということを言っていたのは間違いだとは書いてないのですけれども、婉曲に間違っていたことを認め、「デジタルは、写真の表現に新たな可能性が加わったものだ」という定義に変えておられます。

私の定義は、下にあります。「170年前に発明されたダゲレオタイプがフィルム写真にかわったように、フィルムが撮像素子に進化した写真であつて、IT革命の一翼を担うもの」というのが私の勝手に定義したものであります。ちなみに、写真が発明されたのは銀板写真で、ダゲレオタイプと言いますけれども、ちょうど今年170年目に当たるそうです。ということで、デジタルは写真である。今、コンテストも、前は銀塩と分けていましたけれども、差がなくなってきたようです。若松さんがおられますので、その辺はまた色々とお話したいと思います。

《和田式写真術とは？》

デジタル写真家と勝手に言っていますので、一応、その極意をここに書きました。

「すべての作業は自力でおこなう」。フィルムは一人ではできない。分業で、現像したりとか、そうしたものが写真であつたわけですが、デジタルの場合は、最初から最後

まで全部自分で行うことができます。それが一番の素晴らしいところだと思うのです。

「写真はカメラが写すもの」。何を言いたいかというと、いいカメラを買いなさいということです。私は色々なところで写真を撮っていますけれども、ボタンを押しているだけなんです。あとは、構えて、ああ、いいなと思ってやっているだけで、写すのはカメラが写すのです。ですから、いいカメラを買わないといい写真は撮れないということです。今、わざと安いカメラで撮っているプロの方もいらっしゃるのですが、あれは遊びであって、あんなことしなくても、いいカメラが今安くありますから、特にオリンパスなんか素晴らしいと思いますけれども、それでどんどん撮ればいい写真が撮れますよということを言いたいのです。

一番大事なことは、撮影ポイントです。祭でも景色でも何でも、いい場所に行かないと、幾らいい光景でもきれいに撮れません。場所をいかにして取るかというのが大事です。オリンパスの場合は、液晶でこういうふうに（万歳スタイルをとる）、ファインダーだと頭しか写りませんが、ライブビュー機能で脚立が要らなくなったりして、人の後ろにいても頭越しから撮れるということで、位置の確保が非常にしやすくなってきたと思います。

4番目が、「夢中で撮れば名作が生まれる」。これはパッとしないなと思いながらシャッターを押したって、絶対にいい写真は撮れません。すごいなと思って夢中でばんばん撮る、それでないといい写真は撮れないということです。まず、撮る人が凄いとって感動しないと、それを見る人も感動するわけじゃないですね。

「写真は見たままを伝えるもの」ということなのですが、よく、スローシャッターで滝だとか川を何か霧がかかったように撮っていますが、芸術写真ということであればいいですが、実際そんなに見えないのです。滝は滝であって、雲みたいには見えな^{かた}いわけなんです。そういうことを趣味にする方はいらしてもいいですが、私はリアルにありのまま、見たままの感動をそのまま伝えるのが写真ではないかなというふうに思っております。

「名作はパソコンから生まれる」というのは、フィルムカメラの場合はフィルムに撮ってしまいますと修正できないものですから、カメラですべて勝負しようとしていたのです。私は、原画はただの素材で、階調が合って白飛び、黒つぶれがなければそれでいいのです。ホワイトバランスがどうだとか…。でも、もうオートでいい。あとはパソコンで何でもできてしまうのです。カメラだけで勝負しようというのが今までの考え方だったので、私は、写ればいい、良いカメラで撮って、あとはパソコンでしっかりやれば素晴らしい写真ができる。これがデジタル写真の極意だと思っています。

それから、撮影術について書いてありますけれども、デジカメ二刀流ですね。小型、軽量、高性能のオリンパス一眼レフ、これに決定です。他のニコン、キャノンはフィルムカメラをCCDに変えただけで、重たくて大きくて、望遠なんていったら何キロもあります。ところが、オリンパスさんは、全部設計をやり直して、最初からフォーサーズという規格を作って小型、軽量になっています。例えば超望遠 600 ミリでも 13 センチくらいですか、本当に軽いです。ですから、旅行であちこち行って、世界中を回っても苦にならないということです。他のメーカーのはリュックサック 1 日背負っていたら倒れてしまうのではないかとというぐらい重たいです。そういうことで画期的だと思っています。

また、昨日、オリンパスペンが発売になりまして、さらに小型になりました。中のレ

フを外してファインダーがないのですね。ライブビューという後ろの液晶だけで見るのですけれども、そのために小さくなって、CCDに当たるところはE-30 だとかフラグシップモデルと全く同じものがあるのです。ですから、小さくて軽くて、撮ったものは一眼レフのフラグシップモデルと同じクオリティのものが撮れるという衝撃的なカメラです。昔のペンというのはフィルムのサイズが半分でしたから画質が落ちたわけですが、今回はプロでも使えるような画質で、しかも小さいということで、昨日、昼休みにヨドバシ新宿店に行ってきましたけれども、買えません。事前に予約していた方でも今日ももらえない人がいると言っていました。今日頼んでも半月とかその先だというようなことで、オリンパス始まって以来の大ヒットになっているようです。若松さんが来られておりますので、その辺色々とお聞きいただければと思います。デジカメ専用の設計をやり直したために、1、2年出遅れたのですけれども、追いつき追い越し、どんどん差がついて、デジカメと言えばこれからはオリンパスがもてはやされる時代になると思っております。

1台のカメラで画素を大きくして撮ろうということではなくて、連続写真で撮ればいいんです。2枚3枚をちょっとダブらせて撮せば壮大なパノラマ写真が生まれます。パソコンでシームレスにつなげますので、1,000万画素が2,000万画素、3,000万画素の写真になるわけです。カメラだけで勝負するというのは古いということです。手ぶれ防止、ライブビュー、フルオート、こういったことで、もう三脚も要りません、脚立もなしということで、カメラがこんなに素晴らしく進化してきましたので、シャッターを押すだけで簡単に写真が撮れるというのがデジカメだと思います。

プロの方とか凝った方はRAW だとか何か言っておりますけれども、あんなの要らないです。工場出荷状態のJPEG形式、八分の一圧縮なんですけれども、これで十分です。全紙に引き延ばして写真展をやりましたけれども、全て八分の一圧縮で写したものです。今日は全紙のものを皆さんにくじ引きでお渡ししますけれども、全紙に伸ばしても綺麗ですので、RAW だとかというのはもう必要ないということがお分かりいただけたらと思います。

どんどん時間がたってしまっていて、残り少なくなってまいりましたけれども、駆け足で「世界の旅」に入りたいと思います。

《アフリカ》

最初に、アブ・シンベル、これはエジプトなんですけれども、松井公代さんが撮られたのです。私はまだ行ったことがないので、もう行った気持ちになっています。これはナイル川の上流にありまして、アスワン・ハイ・ダムを建設すると水没してしまうということで、各国がお金を出して200メートル離れた約60メートルほどの高さに移築したのです。それで、世界遺産か何かに登録をしてやらないとなくなってしまうのではないかと、これがきっかけとなってユネスコの世界遺産が始まったわけです。そういう記念すべき画像でしたので最初に載せました。この方は本当にあちこち行かれておりまして、お元気です。

ツタンカーメンのルクソールです。これは銃撃事件があったところでちょっと治安が悪いのですけれども、今は大丈夫なようです。ツタンカーメンの墓、これはカイロの

考古学博物館にあるものです。これは日本にも来ました。

それから、さらに南に行きまして、ボツワナの野生王国、これは象が一番多いところ
です。さらには、ケープタウン、喜望峰です。すごいですね。旅友と回られているよう
なんですけれども、本当にお元気です。これなんかいい写真です。お上手なんです。天
性の感性があるのでしょうか、びっくりしました。

《南アメリカ》

アフリカ大陸から、今度は南アメリカです。ブラジルの方に行かれています。リオの
カーニバルです。これもなかなか参加するのは大変なんです。これはインディオの山車
です。こんなに大きいのです。すごいコスチュームです。ほぼ裸みたいな感じでびっく
りします。(笑声)

さらには、日本でも非常に人気が高いペルーのクスコです。そして、ここがマチュピ
チュです。これは一番か二番くらいに行きたい人気の高いところでは、高度が高いもの
ですから、病気になったりするようすけれども、松井さんは元気に回られています。
これはコンドル、よく撮れています。綺麗です。それから、飛行機に乗られまして、ナ
スカの地上絵です。これもコンドルです。これはまだ、誰が描いたか分からないという
ことです。

《スイス》

これは私が撮ったのですけれども、スイスです。このランドヴァッサー橋というのは
よくパンフレットの表紙に出てきます。ぜひこれは撮りたいということで1時間前から
場所取りをしました。トンネルとトンネルの間にこの橋があるのです。一等席だと窓が
開かなかったので、二等席まで行って場所取りをして、そこから手を出して撮ったので
す。オリンパスのライブビューだからできるのです。これは列車の中から撮っているの
ですから、すごい写真だと自分で褒めています。

これがスイスの三大名峰、マッターホルン、ユングフラウ、モンブランです。モンブ
ランに登られた方、沖本陽子さんのご主人ですけれども、若いご夫婦と二組で、こちら
の方がガイドなんですけれども、その写真を発表させていただきました。今日来ておら
れますが、本当に素晴らしい写真です。沖本さんは、山歩きをしながら写真を撮られて
いるのです。これなんかすごい写真ですよ。馬の背のようなところを歩きながら写真を
撮っているのです。山へ行かれる方はなかなか写真は撮ってないですね。こんなところ
を行かれて、かつ、写真を撮られるという人は少ないので、びっくりしました。ロック
クライミングができないとモンブランに上がれないのだそうです。ですから、こういう
練習なんかもしている。ご主人の高地訓練だとかが終わって、いよいよ登るというこ
とで送り出しまして、奥さんはお留守番ですね。

これは Google の立体写真。ただです。インターネットの Google アースで取ってきた
のですけれども、すごいですね。ここがシャモニーです。それからロープウエイ、登山
電車に乗って、ここから上がって、初日はグーテ小屋に泊まって、翌朝アタックする
ということで登られました。これがロッククライミングが必要な岩で、この上にグーテ小
屋があって、ここのクロワールというところが石が落ちてきたりして毎年遭難するら
しいですけれども、こういうところを登っていかなければ行けないということなんです
が、

見事に登られまして、グーテ小屋から下界が見えていますね。これはご主人が写されました。

それで、翌朝、早朝出発して、8時5分に70歳にして頂上を極めたということで、すごいことだと思います。ちなみに、若い方は途中で棄権されて登られなかったということで、いかに大変かだと思います。頂上は5分しかおられなかったようですけども、本当に大変なご苦労だったと思います。

それから、沖本陽子さんです。格好いいですね。うちの家内ではとてもこういう格好はできないと思います。(笑声) カメラをちゃんと下げて歩いていかれて、本当に本格的な山歩きをされて、素晴らしい元気をいただいております。

《質問タイム 正解者には記念品》

質問：今日、7月4日は何の日でしょうか？

《回答者》アメリカの独立記念日です。(拍手、記念品を渡される)

ヒントを出そうと思っていたのですけれども、フォース・オブ・ジュライ。1ドル紙幣の肖像画、これはジョージ・ワシントンですね。ということで、アメリカの独立記念日です。最初にこの日にしましょうと石川さんから言われたときに、あっ、フォース・オブ・ジュライだというふうに思いまして…。何と今日はアメリカの233回目の独立記念日です。徳川幕府は400年も前からあるのですから、日本がいかに古い国か、アメリカが随分新しい国だなということがよくわかります。

《北アメリカ》

ちなみに、これはサンフランシスコの夜景です。これを撮られたのが今村一憲さん、今日は残念ながらご都合が悪くて来られてないのですけれども、「春のアメリカ二人旅」ということで、この方もお二人で手づくり旅行をされて、「よく生きて日本に戻られたな」というふうに思っておりますけれども、(笑声) 非常に危ないところをお二人で自分でツアーを組んで回られたのです。グランドキャニオンとかニューヨークに行かれております。これが同時多発テロのツインタワーです。その跡、現在建設中のところまで行かれまして、去年撮っておられます。5棟建設されるのです。新ワールド・トレード・センターということで、その中の541メートルのフリーダムタワーというのが自由の女神像の持つ松明をイメージしたものだということで2011年に完成するというふうに聞いています。

このテロのお陰で、入国審査が厳しくなり、アメリカに行く場合、スーツケースに鍵をかけたら壊されますので、鍵をかけないで預けなければいけないということになりました。それから、イギリスも屈辱的です。このあいだギリシャにロンドン経由で行ったのですけれども、ヒースロー空港で2回とも箱根の関所みたいに上着を脱がされ、ベルト、靴も脱がされて厳しい検閲を受けました。

次は、カナダです。これも素晴らしいところです。スノーコーチャーでのツアーは、カナダ、ここだけです。氷河ツアー、すごかったです。雪と紅葉と緑があるという景色はなかなかないのです。南光さんに教わったのですけれども、これは値打ちがあるということです。そういった光景が見られる。

エメラルド色をしたレイク・ルーズですが、氷河が大地を削ってできたモレーンという微粒子が堆積してこんな色になるということです。これも氷河がありまして、雪が降っていて、紅葉があつてということでなかなか貴重な写真なんです。

それから「早起きは3文の得」、これも南光さんに教わったのですけれども、朝早く起きて日の出前に行きますと、日の出のときのモルゲンロート（朝焼け）だとかが見られるということで、ここはキャンモアで、すごいです。燃えているような写真が撮れました。だから、旅行のときは必ず朝早く起きて行くことにしています。

これも、ちょうど結婚式で記念写真を撮る場に遭いまして、雪だとか^{こうよう}黄葉だとかで、きれいな写真が撮れました。

これはナイアガラです。デジカメで3枚くらい合わせたのかな。それぞれしか撮れないのです、余りにもでかくて。これをつなげてしまうと、こんなふうにシームレスになって、こんなにすごい写真ができてしまうというのがデジカメです。

これはカナダ滝です。全員カップを着て滝の下まで行くのです。ずぶ濡れになります。滝口から撮れるのですね。これもすごい写真だと思います。

ちなみに、滝といいますと、世界の3大瀑布があります。イグアスの滝、ブラジルとアルゼンチンの境界ですか、悪魔の喉笛。それから、ジンバブエとザンビアのビクトリア・フォールズです。「Wa☆Daフォトギャラリー」にこの三つが既にあるということで、それぞれの方が行かれて、見る事ができるのですね。

《ニュージーランド》

ニュージーランドからは、今日、原田真梨子さんが来られています。ここがオークランド、7月1日に冬休みで帰ってこられたそうですが、こちらの大学に留学されているということです。私もニュージーランドに行つてまいりましたが、とても美しい国で、このマウント・ナウルホエは全紙に引き伸ばして発表したのですが、今日くじ引きで差し上げます。飛行機の中では常にカメラを持っています。ぱっと見て、ああ良いな、ということで窓から撮ったものです。普通窓側の席は取れませんので、後部のキャビン・アテンダントがいらっしゃる、トイレのそばの出入口の窓から撮ったわけです。雑誌社からすぐ使わせてくれという話が来ました。シャッターを押しただけで、オリンパスでこんな全紙の凄い写真が撮れるということで、本当に感動しました。

これはニュージーランドで一番高いマウント・クック、これも夕方なんですけれども、アルペングロー（山頂光）です。ここの出身の方がサー・エドモンド・ヒラリーさん、エベレスト初登頂の方です。ここの蜂蜜を採る養蜂農家に生まれてここで鍛えた、非常に大きな方です。^{かた}残念ながら、去年亡くなられました。エベレストというのは発見が遅かったのですけれども、これは松尾京子さんが行かれて撮つてこられた写真ですけれども、カラパタール、標高5,500メートルのところまで行かないと見えないのだそうです。南光さんも行かれたけれども、撮れなかったといつて戻つてこられたのですが、それくらい大変なことのようです。それを登るのはもっと大変だと思います。

クイーンズ・タウン、きれいなところですよ。それから、ロトアルの方に行きまして、マオリ族です。南太平洋の島民の中で、一番優秀な民族です。

《中国》

中国に行きました。桂林です。ちょうど霧がかかっているところでよかったと思います。天気がいいと余りよくないです。そういう意味で、運がよかったのではないかなと思います。ツーパイ（竹排）です。それから、夜、こういうツアーがあります。これは何と鵜飼うかいなんです。ひもがついてないでしょう。日本のは遅れていますね。中国はひもなしで、魚を捕ったら逃げずに戻ってくるのですね。もうちょっと情緒よく何か衣装があるととってもいいのですけれども、すごいなと思いました。これは川鵜かわうだそうです。

いよいよ南光優さんです。こちらは奥様ですけれども、この方も山を歩かれまして、タークーニャン（大姑娘）といって、これは中国です。ブルーポピーといって、青い虞美人草ぐびじんそう。ブルーのポピーはここしかないということで見に行かれたのですけれども、ついでに登ってしまおうということで山登りしています。スイスにしかないのかなと思いましたら、中国にもエーデルワイスがありました。

さっきはベースキャンプだったんですけれども、今度はアタックキャンプ、二つ目のキャンプに移動しまして、ここからアタックするということです。ロッククライミングがないものですから、女性でも登れます。こんなすごいところに行くのでちょっと危ないなと思うんですけれども、アタックの日かたです。奥さんとお二人で頂上に立たれて、5,000メートルですから、凄いことですね。この方もお元気で今でも旅行されています。

《南極》

それから、松村富夫さんという方、南極に行かれました。アルゼンチンからポーラースターという船に乗って行かれたのです。この方が奥さんなんですけれども、途中でロアリング・フォティーズと言いまして、吼える 40 度線、すごく揺れるんです。ベッドから落ちて大分擦り傷を受けたそうですけれども、そういった苦労を経て南極大陸に上陸したところですよ。ペンギンがいて、写真としてはよく見る光景ですけれども、自分で撮ってくるというのがすごいと思うのです。南極は、何と温泉があるのです。砂浜を掘りまして温泉が湧いてくる、南極温泉ということで、驚きました。南極で温泉に浸かるなんてすごい贅沢だなと思います。お金もかかりますし大変だと思います。よく行かれたなと思いますけれども、本当に元気ですね。

《インド》

丹下誠司さん、インド通で知られる方です。この女性が美しいということで撮られたようすけれども、インド・アグラのタージ・マハルです。これは世界遺産ですけれども、これが人の大きさですから、いかに巨大なものかということです。ムガル帝国ほうの権勢、どれだけすごい帝国だったかがわかると思います。こういった庶民の方にも非常に愛情あふれるカメラワークで生活を切り取っておられるのが丹下さんの特徴です。

ガンダーラ、有名なところですよ。パキスタンまで行かれました。こういったのは見たことがあると思います。これも有名な、本物です、釈迦苦行像を撮ってこられた。

それから、アジャンタです。虎の穴になっていたところを発見されて遺跡が出てきたということなんですけれども、この中の洞窟まで行かれて、これが蓮華手菩薩れんげしゅぼさつです。これが有名な壁画です。法隆寺の金堂壁画、焼け落ちてしまいましたけれども、これは切手にもなっておりますが、この観音菩薩と良く似ていて、日本仏教のルーツではないか

といわれています。

丹下さんは、仏教遺跡をあちこち回られています。お釈迦様にゅうめつが入滅されたとき、沙羅双樹さらそうじゆの下で亡くなられたわけですが、その写真を丹下さんが撮ってこられました。これが沙羅双樹の花なんですけれども、実は日本では夏椿のことを沙羅双樹、沙羅の花というふうに広辞苑にも出ているのです。これは、日本から行ったお坊さんが中国で間違って教えてもらって、沙羅双樹が夏椿だとなってしまうんです。あるお寺でそういうふうに書いてあったので、あれは違いますよと、メールをあげました。それで感謝していただきました。今みたいに簡単に世界旅行ができなかったからそんな間違いが起こったのだと思います。

これは小池淳二さんです。小池さんも「感動写真集」の仲間ですが、インドの場合は、まさに仏教が滅びてヒンドゥー教になっています。ヒンドゥー教というのはリンガ（男根）がご神体なんです。シヴァ神のご神体ということで、日本でもこういったのが神社にありますけれども、まさにインド全体がこういうものをご神体あがとして崇めていて、すごいなと思います。

《フランス》

今度はモン・サン・ミシェル、日本でも一、二番の人気があるところですが、随分前に行きましたけれども、砂に埋もれています。こういうふうに道路をつくって駐車場をつくったために砂が溜まってしまったことから、これを撤去して橋を架け、元に戻そうということで、工事が進んでいると聞いています。

フランスは素晴らしいところなんです。やはり、行くなればベルサイユもいいなと思います。1789年、フランス革命のときにルイ16世とマリー・アントワネットがここに立って民衆と話をした。彼女が「パンがなければお菓子を食くわなければいいじゃない」と云ったというのは嘘だったようですが、とにかくすごい建築物です。

この方はルイ14世、ベルサイユに移って一番栄えていたときの王様なんですけれども、ハイヒールを履はいています。本当に民衆とはかけ離れた生活をしているわけです。何でベルサイユに移ったかといいますと、臭いのですよ。トイレの汚物をそのまま捨ててしまうのですね。それでいたたまれなくなって、移ったのです。

今度は、ベルサイユも、5年、10年したら同じように臭くなって困ってしまった。フランスで香水がなぜはやったかというのは、その悪臭を香水で紛まらわせるということだったわけです。パーティーをやっても、皆さん移動式のトイレを持ってきて、後で汚物を庭に捨ててしまうのだそうです。こういうところに捨てたりしてそのままにしていますので、やがて何年かしたらベルサイユも同じように臭くなって困ったと、ちゃんと記録に残っているのです。こんなすごい建物をつくって、すごい文化があるにもかかわらず、なぜそんなふうに衛生状態が悪いのか不思議でならないのですけれども、面白いなと思います。

《イタリア》

イタリアはヴェネツィアです。ここはどこから撮っても絵になります。岩本圭司さんという方が写真を提供して下さいました。この方は、毎回、海外はヴェネツィアしか行かないという方です。私もヴェネツィアは本当にすごいところだと思います。

《スペイン》

今日、横尾^{よこおたし}さんが来られておりますけれども、スペイン、これはドン・キホーテの例の風車です。それから、ミハス、白い家です。これも有名なところですよ。全部横尾さんが撮ってこられました。

ちなみに、横尾さんは世界中の路面電車を撮りまくってまして、今年も6月上旬に戻ってこられたのですけれども、70日間ヨーロッパを車や電車で回って撮ってこられた。これだけ回られているのです。45カ国340都市、6,541枚の路面電車の写真があります。すごいと思いました。これはオーストラリア・シドニーの電車とモノレール、ちゃんとこの二つが一緒に走っているところを待って撮っているわけです。大変なことですね。このアングルはなかなか撮れないですよ、ちょこっと行ったってなかなか撮れません。本当にすごい写真があります。

《ドイツ》

これはドイツです。ローテンブルク、それからノイシュヴァンシュタイン城、ライン川下りです。これもパノラマの写真なんですけれども、ローライ、ライン川下りもなかなかよかったです。

《北歐》

ノルウェー、これは世界一のフィヨルドがあるところですよ。

スウェーデン、これはストックホルムの市庁、黄金の間ですよ。

これはフィンランドですけれども、何か UFO みたいな教会があるのですけれども、実はこのテンペリアウキオ教会を見て、実際に見に行かれた方がいらっしゃいました。帰ってきて、びっくりしたとってメールをいただいたのです。私も悪いことしたなと思ったのですけれども、人によったら、写真を見てこれはすごいと思って行かれるのですよ。だけれども、行ってみると期待外れだったという方もいらっしゃるのです、やはり写真は写真でしかないのかなと反省をしております。ただ、私は素晴らしい教会だったなと思っております。

それから、デンマークです。コペンハーゲン、これはアンデルセンがよく行ったところで、きれいな街でした。これは人魚姫です。世界三大がっかり。(笑声)ブリュッセルの小便小僧にシンガポールのマーライオン、それから人魚姫ということなんです。結局、行ったって、ほんと、何だこれはという感じで、皆さんがっかりするということです。けれど、この後ろに色々なエピソードがあったりします。これを見てください、人魚姫と申しますけれども、人魚じゃないですよ。普通、下半身が魚でしょう。人間です。足だけがちょっと、ひれがついているだけで、作られた方はかなり考えているんですよ。中に物語がありまして、そういう意味で、私はそれなりに感動できるのではないかなというふうに思っています。

デンマークに行ったとき、ロイヤル・コペンハーゲン本店に行きました。銀座にある本店というような感じですが、皆さんご存じのデンマーク皇室御用達の高い陶磁器です。ここで遅れてしまって、バスが予定どおり出発できなかったのです。どうしたのかと申したら、後回しにされたのです。その理由は、日本人は店内に長くいても安心だから、長くいられると困る方を先にレジで精算して、それで日本人は遅れたと。いか

に日本人が世界中で一番評価が高いかということがわかります。本当かどうかわかりませんが、そんな弁解が出るわけですから、びっくりします。最近「アー・ユー・チャイニーズ？」と聞かれるのではなく「アー・ユー・ジャパニーズ？」です。チャイニーズの方は、中国人なのに日本人だと言う人がいるそうです。その方が警戒されませんし、待遇がいいんだそうです。本当にどこに行っても日本の観光客の方は非常に紳士ですし、評判が高いですね。

《ギリシャ》

これはアテネ。こういう裸ばかりなんですよ、アテネは。古代オリンピックも全裸ですよ。何でだろう。これはパルテノンのエンタシスです。裸ばかりなんですよけれども、実は調べてみますと、昔はギリシャ人の男性は禪ふんどししていたのです。古代オリンピックの発祥地です。あるとき、それが外れてしまったらしいのです。これは嘘じゃないです、岩波新書に書いてあることですので。それで転んで死んだか、あるいは外れた人が優勝したか、その理由はわからないのですけれども、その事故があったのは間違いなくて、その事故の後に全裸になったそうです。その後はみんなこんなふうに、これは相撲なんですよけれども、格技。それから、表彰式もすっぽんぽんです。(笑声) これは月桂冠で、この時代からあって、今はマラソンの優勝者だけに月桂冠が与えられますけれども、当時は、優勝したら全員これがもらえたということです。要するに、人間は、神様、当時のゼウスが自らに似せて造ったものだから、鍛えられた肉体は誇るべきものだというので、動物も全て裸で暮らしていますから、恥ずかしくないということのようです。それで皆さん裸で、こういった残っている彫像も殆どが全裸ということのようです。

それから、デルフィというところの、これはオンファロス（大地のへソ）です。要するに、中華思想がありまして、ギリシャが地球の中心だったらしいのです。それをアポロン神殿に置いて、神のお告げですか、アポロン神の神託ということが行われたということです。月桂冠をかぶったり、こういったことから発生して、以後、ローマだとかヨーロッパの文化に全部根差したものになっております。巫女が神懸かりとなってお告げをアポロンからいただいて、それを伝えるということで大変繁栄したのでした。

《終わりに》

本当に、駆け足で回りましたけれども、ちょっと時間をオーバーしました。お気づきだと思いますけれども、六大陸全部行きました。

日本に帰るたびに、皆さんもそうだと思いますけれども、治安がいい、食事がおいしい、清潔である、それから接遇の細やかさ、これは世界一素晴らしいということを感じます。それでは、「第一部 世界の旅」、これで終わりたいと思います。どうもありがとうございました。(拍手)

～ 抽せん会の後、休憩 ～

【第2部 日本の祭】

時間を超過してしまって申し訳ありません。祭の方はもっと長いので、多分途中で端折ってしまうと思いますけれども、これはCDに全部納めていますので、ご希望の方に全部差し上げます。説明がなかったところはまた後から見ていただければと思います。それでは、「第2部 日本の祭」ということで説明させていただきます。

《葵祭・烏相撲・祇園祭/京都》

これは京都、葵祭です。祭といえば京都ですね。感動しました。平安時代は、祭といえば葵祭のことを言うんだそうです。今年も行ってきたんです。これは、2002年に撮った牛車なんですけれども、写真展にも出しました。今年撮ったのはこれです。どうでしょう。カメラが進歩しましてこんな素晴らしいきれいな写真が撮れましたけれども、家内はこっちがいいと。何でかといいますと、車輪がちゃんと写っているのです。バランスがいい、表情もいい。こちらは車輪が駄目なんです。この後通り過ぎていくのですけれども、人が多すぎて、人ばかり写ってしまって、肝心の牛車の素晴らしいものが…。だからこれは名作です。絶対これに勝てるプロの方はいないのじゃないかということを経験して自慢したいわけです。何枚も撮って、たまたま写っていたということで、これはE-20ですから、一眼レフの前ですよ。それでこんなに撮れてしまうのですよ、オリンパスは。こちらは天気がよくて本当にきれいなんですけれども、残念ながら…。この後は齋王代の女人行列で、美しいです。

京都の祭は、頭からつま先まで衣装の違反がない、変質がないといいますか、こだわっています。絶対に運動靴だとかはないです。どんな祭も素晴らしいです。伝統というものに誇りがあるのですね。それを見習ってほしいです。

烏相撲、これなんかも、齋王が見るということで、昔は、齋王は天皇の娘さんだとかそういった方だったのです。今は齋王代という民間の方になっていきますけれども、齋王代が見て、その前で相撲をとる。普通はまわしなんですけれども、六尺禪でとるというのがこだわっている。当時のものを全て再現するということです。

それから、京都といえば祇園祭。これも大分前に撮りました。生稚児が真剣でばさつと注連縄を切る、これから祭がスタートするのですけれども、よく撮れています。これは撮影場所を確保するのが大変なんです。このアングルで、望遠で何枚も撮って、注連縄を切った瞬間です。ばさつと離れたでしょう。紙が半分切れて…というのはなかなか撮れないというのを自慢したかったわけです。

山鉦です。辻廻しが有名です。真っすぐにしか進めないものですから、向きを変えるには竹を敷いてワッサワッサ引っ張るのです。それが面白いということで、これに見物人がたかるわけです。扇をもって、上に乗った方が音頭をとる。「音頭取扇で楯取る辻廻し」という俳句を作りましたけれども、こういうのが京都の祇園祭です。

京都は、祇園囃子が有名です。この山車、囃子方が北観音山に乗って、雅といいますが布を下げているのです。何だろうと思ったら、笛だとかの袋なんです。こんなものを垂らして何だろうかという人もおれば、これが色々な模様があって雅でいいという、そういう趣味の世界なんです。この祇園囃子も非常に単調です。行進曲ですから単調でおとなしいです。コンチキチンという表現らしいのですけれども、それがいいというこ

となんです。

新町しんまちを通っています。粽ちまきを投げちゃうんです。鉾粽ほこちまきといって、投げ込むのです。そういうようなこととか、本当に雅な祭がそのまま歩いていくということです。

《秩父夜祭/埼玉・秩父》

日本三大曳山祭の二つ目、秩父夜祭です。これも素晴らしい祭です。これは私が撮った写真なんですけれども、この屋台の中に秩父囃子の方がいらっしゃるのです。外から見えないのです。この4人の扇を持って音頭を取っている方が囃子手というのですけれども、この方が主役なんです。一生に一度この役をやって、晴れ舞台だということで、こちらも雅なお祭だと思います。

これは幸島潔さしまきよしさん、今日来られています。素晴らしい写真を送っていただいて発表させてもらいました。実は、私は自分で写真を撮ったのですけれども、最後の団子坂の写真は立ち入り禁止になって撮れなかったのです。屋台と一緒にいったのに警察が入ってくれなかったのです。それで愚痴をこぼしていましたら、ホームページで見た幸島さんが何とか撮ってもらおうということで、宿の手配だとかしてもらったのですけれども、宿も取れないのです。あきらめていたのですけれども、ご自分が撮られてお寄せいただきました。それで作品を作ったのですけれども、素晴らしいです。この坂を上るのが最後のフィナーレで、狭いものですから、なかなか行けませんし、なかなか撮れないのです。これを一生懸命引っ張って上げる、この写真なんか素晴らしいと思います。

最後は花火が上がるのです。これは私が合成しました。(笑声) 方角はちょっと違うのですけれども、こんなふうになって大団円を迎えるということです。秩父にある素晴らしいお祭です。

それから、子供さんが主役になってやる夏祭。これも発表していただきました。秩父川瀬祭かわせまつり、夏です。これも雅なお祭で、夏ですので、冬みたいに寒くないし、非常にバランスの整ったいいお祭だと思います。

《青梅大祭/東京・青梅》

私の地元、青梅大祭、これもずっと密着取材で撮ってまいりました。仲秀英なかしゅうえいという人形師にんぎょうしの曾孫さんがちょうど来られていまして、写真を撮ったのです。

大祭の朝、こんなに大勢の、200人くらいでしょうか、町会のお囃子連合である青梅おうめ囃子會そうすいかいが一同に会して住吉神社に参拝し、それから本番を迎えます。

青梅の場合は、こういう拍子木という方がおられて、これも一生一代です。たった一人なんです、身支度とか色々なことで大変な費用がかかりますけれども、今回は澤渡敏夫さんという方です。文房具屋さんのご主人でしたけれども、ずっと取材させて下さったのです。

「ひっかわせ」といいまして、屋台が会おうとお囃子や踊りを競うわけです。江戸型の屋台といいまして、後ろに控えの間があり、その前にちっちゃな舞台があって、そこでおかめ、ひょっとこぎんぎつねとか銀狐などがお囃子にあわせておもしろおかしく踊ります。

最後は、こういうふうに各町の拍子木が六町、これもなかなか撮れないですよ。中に入れないですから、半天を貸してもらおうとか、そういうことでないと警備員からはじき返されますので、これだけ撮るといってもすごい写真なんです。こういうふうに、最後

はフィナーレで盛り上がるのです。曲目に合わせて踊ったり、こういうことで盛り上がる、それが青梅のお祭です。

実は、江戸の天下祭ではこういう屋台が江戸城まで入っていったわけですがけれども、明治になって電線が張り巡らされて通れなくなったということで、やめてしまったのです。そういったものを青梅の商人たちが買って、それ以来お祭で使われるようになったということです。

どうして地元の方は青梅囃子と言わないのか、私も不思議なんですけれども、郷土誌家の方の著書ですら「青梅の囃子」と書いてあるので、固有名詞にしたらということで皆さんの了解を得て使っております。鐵砲洲も鐵砲洲囃子ということでいかれたらいいんじゃないかなと私は思っております。

《岸和田だんじり祭/大阪》

次は、岸和田のだんじりです。これは本当に走り回るので。ただひたすら走る走るということで、ここの主人公は大工方^{だいくがた}という方で、屋根の上で跳んだりはねたりするだけなんです。これが格好いいと、子供たちも屋根上のこの人たちのようになりたいということで憧れの的になっています。こういうふう^{うちわ}に団扇を持ったりしながらパフォーマンスをするのですが、軒先を壊しながら走ったり、だんじりがひっくり返って人が死んだり、かなり荒っぽい祭なんです。

そこで聞いた話が、岸和田警察署の指名手配の検挙率が日本一だそうです。何でだと思いますか。お祭だと必ず戻ってこないといけないのだそうです。戻らないと村八分になってしまうものですから、したがって指名手配の人もお祭のときだけは戻ってくるので捕まってしまう。(笑声) だから、岸和田のだんじり祭のときにみんな捕まるので、岸和田が指名手配の犯人検挙率が日本でナンバーワンだと言って自慢していました。それくらいお祭というのは心を惹かれるもので、日本人のDNAに何かあるのではないかなというふうに思っております。

《阿波踊/四国・徳島》

これは徳島の阿波踊、これも素晴らしいです。これも宿が取れずに、保安部に頼んで隣の町に取ってもらって、この座席も有料なんですけれども、何とか取ってもらいました。有名連、企業連、職域連、これが市役所前、ここが舞台です。ここを5分か10分狂乱して踊るわけですが、これも素晴らしい祭です。見なれた光景ですが、これを自分が撮って自分のものなんだということが写真ファンとしては嬉しい。大村崑さんだとかいっぱい有名人も来ますし、これもよく出ますね、やつこ踊りということで、阿呆連^{あほうれん}だとか有名な連がいっぱいありまして、とにかく現場へ行くだけで大変です。ホテルも満杯ですし…、だけれども、夏は阿波踊がすごいなと思います。

《東北四大祭》

今度は、東北に行きますと、ねぶた祭。昔は三大祭と言いましたけれども、今東北は四大祭、五大祭になっています。

ねぶた祭は、女性も男性も同じ格好なんです。これが面白いです。非常に派手な格好で跳人^{はねと}と言っていますけれども、踊りまくり盛り上がるのです。ねぶたの下で支える人。

大変ですよ。変な格好でジグザグに走りながら、この真ん中の人^{かんとう}が命令を出しながら上と連携を取って進んでいくのです。これも毎年祭が終わった後、壊すんです。1台造るのに何千万円とかかりますけれども、ねぶた師が生活できるんでしょうね、去年のものを使われたのでは仕事がありませんので、必ず壊してまた作るという、すごいお金をかけて毎年やられている、すごいお祭です。

それから^{つぎたけ}竿燈、これもコンテストがあったり、見ているだけで本当に面白い。応援しながら、こうやってやるのですね。^{おおわか}継竹を何本も^{ちゅうわか}継いでいくんです、5本だとか6本だとか、提灯の数が一番大きいのが大若、それから中若、小若。これは大若です。一番大きいもので、しかも重たいからこんなに曲がってしまいます。これで1本、2本、3本と竹が^{こわか}継いであるのです。これを競っていくということで、見ているだけでもはらはらして面白いお祭です。

これも有名な、「なまはげ」です。常時こういうふうに見せているところがあります。

山形だと花笠まつりです。これもお祭としてはすごいです。これはオリンパスですけども、脚立も何もないです。バンザイスタイルで撮りますとこういう奥行きがありますでしょう。本当はこんな前に行ってはいけないのです。だだっど走って行って、ぱつと撮って逃げてくるのですけれども、(笑声) こうやって横に皆さん座っているだけでうるさく言わないものですから、間にぱっぱと走って、ばんばん撮ってこれだけきれいな良い写真が撮れるのです。これは下から撮ったアングル。ワンちゃんを下から撮っています。オリンパスだと、こういう写真が撮れてしまうのですよ。本当に面白いです。それから、仙台の七夕写真ですね。

^{たかちほ} ^{よかぐら} 《高千穂の夜神楽/九州・宮崎》

今度は、高千穂に行きます。宮崎県の^{ひがしこくばる}東国原さんのところ、いろいろ話題になっていますけれども、知事さんはこの間、これから高千穂は最大の観光資源で売りますと言っていました。本当に素晴らしいところです。上平明さんが赴任していたときに行かれて、^{よかぐら}夜神楽を撮られています。これは徹夜なんです。本当に大変だったと思います。33番まで神楽があるのですが、それを全部撮影されて、感動写真集に発表して頂きました。これはすごい記録だと思います。皆さん退屈してしまって寝ている人もいっぱいいたそうですけれども、(笑声) ^{かぐら}神楽というのは、^{かみくら}神座が^{かぐら}神楽になったということで、こういった^{かぐらやど}神楽宿ですね、ここに神様が降りてきて、それで神様のために舞う、慰めるために神と戯れるというのでしょうか、そういうお祭なんです。色々なストーリーがあって、ずっと舞うのです。最後は、^{あめのいわと}天の岩戸が開くということなんですけれども、33番の^{くもおろし}雲下で終わりなんです。それで大団円というようなことで、徹夜で朝になってしまうのですね。すごいお祭です。

^{てっぽうずたいさい} 《鐵砲洲大祭/東京・鐵砲洲》

いよいよ鐵砲洲です。この写真を撮ったのは私と星宏幸さんだけでしょう。お祭のときに建物の中に入れませんから、星さんに交渉していただきまして、歌舞伎座の前のビルの何階かまであがって密着取材しました。これは2008年、去年の大祭のときの^{ごほんじやみこし}御本社神輿です。歌舞伎座前で神輿差しをするこの晴れがましい写真、これは全紙になるくらいきれいに撮れています。これは自慢できます。神社に奉納させていただきまし

た。一番気に入っているのは、御本社神輿ではなくて、宮元神輿の方です。宮元の方は中まで入っていったのですよ。御本社の方は前を通過していただけですけども、こちらの方は迫力があります。完全に人で埋まって神輿差しをしています。

本当は、上から撮ってはいけないとか、上から見ちゃいけないと言われるのですけれども、今は高層ビルの時代ですし、うちの会社だって神棚の上にまだ何十階もありますから、神様の上に人が土足でいるわけですので、その辺は許してもらって、素晴らしい感動を切り取るということで、高いビルから写させてもらいました。

これは下から撮った新富町の担ぐ神輿です。睦会の方です。こういうふうに、担ぎながら踊るんですね。本当に楽しそうです。

これは聖路加タワーですから、こういう東京のまさにビルの中をお神輿が通る、これは御本社神輿ですけども、17ヶ町全部回るのですよ。私はダウンしてしまって、途中で1時間くらい車の助手席で倒れていましたけれども、次々にリレーするんですね。その間ずっと弥生会のメンバーがついて回っていくということで、すごいお祭です。

棒鼻ぼうばなと言って、神輿の一番前のいいところ、これはなかなか担げないんです。この場所が最高の場所ですから、これを取って担ぐのが名誉となるんですね。

これは鐵砲洲児童公園の前です。喫茶店の2階からです。星さんに交渉してもらって、下見のときにここから撮りたいということで、喫茶店の2階のベランダから撮ったのですけれども、これもいいアングルですね。

必ず白馬に乗って、中川宮司がずっとついて回ります。先代の宮司さんも何か居眠りして落っこちそうになったり、(笑声)一日中ついて、重労働で大変らしいですよ。神様が乗っていますので、お供で後ろに宮司がついていかなければいけないのです。そのために白馬に乗って廻る、だから重労働です。ちょっと居眠りされているような、目をつむっているかもしれない、(笑声) 疲れています。

これは、司会をされた石川さんが弥生会の幹事長ですから、石川さんの家の2階に入れていただいて写したのですが、石川さんが何と拍子木をやっています。ここで終わりなんです。Uターンして宮入りするということでこの大祭が終わる。もう暗くなって夜になっています。これもいい写真を撮ることができました。

最後、宮入りの前に鐵砲洲稻荷神社の前で神輿差しです。すごい写真でしょう。これも喫茶店の2階から撮らせてもらったものです。この写真はなかなか撮れないと思います。いよいよ神社に入っていくということで、これも素晴らしい写真になりました。

さんじゃまつり 《三社祭/東京・浅草》

次は、東京・浅草さんじゃまつりの有名な三社祭です。これは、写真が切手になりました志村清貴さんの作品です。今日は報道係で写真を撮っていただいています。三社祭というのもすごい祭です。特に西浅三北神輿にしあささんきた みこしというのが、裸なんです。入れ墨したり禪したり、こういうところなんです。

これは私が撮ったのですけれども、観音堂の裏側です。広場があります。ここに107基が集まるのです。順番にスタートして、連合渡御なんですけれども、神社を参拝して、それから観音堂の前で練る、ということで待ち時間が何時間もあるんですね。

何と、これが西浅三北にしあささんきたなんですけれども、観音堂の前で、この場所はすごい人混みで行けません。それを志村さんが祭に参加しながら撮るんですね。半天を着て、それで撮

っているのです。これはすごいです。絶対に撮れません。このど迫力といいますか、この神輿の場所には西浅三北にしあさんきたの関係者でなければ行けないし、その中でカメラを持ってパチッと決定的瞬間ですね。これは大変な写真です。

これは私が撮った写真ですが、その後戻ってきて、また観音堂裏で練るんですけれども、この時私は脚立を持って行ったものですから脚立の上から撮っています。これもよく撮れていると思います。すごい土ぼこりですね。

こういうふうに入れ墨だとか禪の裸でお神輿を出すというのは、実は江戸時代、「当世四天王」という浮世絵に残っています。そのままでしょう。こちら小舟町こぶなちょうの天王祭ですが、入れ墨を結構しているんです。それがこういう全身の入れ墨ということで残ってしまっていて、実はこれは志村さんが撮られたのですけれども、浅草の普通の市民の方です。この方が二代目彫り師の方です。今でもその伝統を継いで、愛好会といいますか、暴力団ではなくて普通の方がやっています。海外では総入れ墨というのはないのですけれども、部分的なタトゥーは結構多いです。寛大です。ベッカムもこの間入れました。右腕 60 センチ全周に入っていますよ、よく見て下さい。結構サッカー選手でも入れ墨をしていますし、ラグビーでもあります。

さらにこれは、西浅三北町会にしあさんきたが夜の神輿の上で全員裸になって禪一丁でやっています。これは志村さんが撮った写真です。これも素晴らしいです。

結局、何が言いたいかという、今の民俗学者も江戸の神輿文化が残っているのは三社だけだと言っています。具体的には、入れ墨だとか禪だとかそういったものから、三社ということであれば、この西浅三北神輿にしあさんきたのことを言っているのだと思います。

ところが、日本では報道しないのです。こんな凄い神輿、見たことないでしょう。でも、祭を見に行ったら一番人気があります。私も知らなかったのですが、行ってみると、私のカメラが向いていたのがこの裸神輿だったんですね。大変注目を集めているにもかかわらず、テレビには絶対出ませんし、新聞報道もされない。警察が暴力団撲滅運動ということで、そういう人たちが写っているものは駄目だということなんです。

私は、事実をありのままに撮るのが写真だし、そんな差別をするのはおかしいじゃないか、黄色で下の方に書いていますけれども、祭というのは、肩書きをなくしてみんなが裸になって、偉い人も貧しい人も金持ちもみんな平等に神と戯れて、神のご加護に感謝するという神事なのではないでしょうか。日頃の社会的地位だとか世渡りの状況で差別したり、偏見を持ってはいけないと思うんです。異論のある方もいらっしゃいますが、私は公平にカメラを向け、ありのままを明らかにして公表しています。

《深川祭/東京・深川》

さっきの深川です。これは切手になった志村さんの写真ですけれども、これも素晴らしいです。水掛祭みずかけまつりと言います。深川はワッショイです。鐵砲洲もワッショイやるんですけれども、みんなセイヤになってしまって、私はどうしてワッショイがなくなっていたのかなというふうに思いますけれども、ここだけは一生懸命ワッショイワッショイとやっています。みんな掛け声が乱れていますが、深川はこだわっています。

それで、「神輿深川 山車神田 だだっ広いが山王様だ し かん だ さんのう」という江戸時代からの言葉が残っていますけれども、深川は神輿です。だから日本一でかい神輿があります。紀伊国屋文左衛門が奉納した巨大な神輿があったのですけれども、火事か何かでなくなってし

まったのです。今また寄進がありまして、一の宮の神輿ですが、鳳凰の眼にダイヤがはめ込まれていたり、神輿庫で見ることが出来ますから行かれたらいいと思いますけれども、これは担げません。大きすぎて通れないのです。そういうことで飾ってあるだけなんですけれども、やはり日本一の神輿を出すところは深川ですね。

ご存じのように、伊能忠敬です。深川に住んでいまして、富岡八幡宮に参拝してから測量に出掛けたということで、碑があります。

《神田祭/東京・神田》

神田祭も素晴らしいと思います。これは鳳輦、後ろ側が日本橋です。江戸時代の日本橋、今は高速が走っているものですからちょっとみずぼらしくなっていますけれども、そこを管轄しているのが神田明神、神田神社です。

宮司さん、鐵砲洲は白馬に乗っていましたが、今度は馬車に乗っています。この方は運動靴です。京都ではあり得ないです。ちゃんとした衣装でやって欲しいですね。

これも神田です。構内は裸ではいけないということですが、この方は名物の方で、この担ぎダコがすごいですね。これが見せたくて半天を羽織ってないのだろうと思いますけれども、構内はやはりちゃんと羽織ることなんです。

これはいつも言うのですが、水森亜土さん、日本橋の生まれなんですけれども、この方はお祭好きで、一番いいのは、禪を締めたお尻が美しいというのですよ。セクシーだということです。興奮してくるとピンクになっちゃうのがまたいいと。お祭というのはみんな裸になって、それで男女の出会いが生まれるという、昔の原点なんでしょうね。そういうふうに思いました。

それから、神田はさっき言ったように、「山車神田」なんです。だから、神輿じゃなく、山車なんです。今残っているのは羽衣山車だけです。これは上下できるのですけれども、あとはみんな明治になってから売り払われちゃったのです。山車がありません。だから今は神輿祭になってしまいました。

《坂越の船祭/兵庫・赤穂》

それから次は、坂越の船祭に行きます。これは、ちばあきおさんが撮ったものです。神前で参拝しているときは裸です。瀬戸内海ですから水軍なんです、伝馬船を漕ぐときは赤い法被を着ます。そして、こういう神輿渡御のときも裸で作業をして、終わったら法被を着て赤伝馬になります。船団が対岸の島にある御旅所に着くとまた禪一丁になって作業をし、終わったらまた法被を羽織って離れます。

何が言いたいかというと、「神様に近づくには裸になること」が原点にあるようなんです。例えば注連縄張り、これは山口県ですけれども、まず海に入って禊をしまして、それからこういった神聖な注連縄を張るわけですが、全部裸です。これは北海道です。H.I.さんの作品ですが、同じですね。だから、神聖な作業をするというのは着物を着たりしてはいけないのじゃないかということなんでしょう。これは江戸の文化とは完全に反対になっています。所変われば品変わるということですね。

《質問タイム 正解者には記念品》

質問：この城下町で行われる勇壮な祭とは？

お城はわかりますね。姫路ですから。ここはあちこちたくさんあるんです。ヒントは、松原八幡宮の秋季大祭、何か神輿が一生懸命ぶつかり合ったりしていますけれども、何かしているみたいですね。誰かご存じの方はいませんか。

《灘のけんか祭/兵庫・姫路》

正解を言います。これは「灘のけんか祭」です。結構有名な祭なんですけれども、すごい祭です。これは宮神輿なんです。3台ありまして、神輿合わせといいましてガツンガツンとぶっつけ合わせるのです。こんなふうになって、これは神様が乗っているんですよ。上に乗ってしまって、落っこちている人もいますけれども、これはよく撮れています。この人が落っこちて死んでしまうんです。その瞬間が撮れていたのですね。私、たくさん撮っていましたから、このすぐ後に落ちて神輿が乗っかるんですね。翌日、神戸新聞を見たら、心臓破裂で死んだというふうにあります。こんなお祭というのは何なんだろうかと思います。それでも救急車で運ばれただけで、祭が中止じゃなくて、そのまま進むのですから。最後見て下さい、神輿の屋根を蹴破っています。聞いてみたら、激しければ激しいほど神意にかなう、神様が喜ぶというのです。それで皆さん頑張っているんだと思うのです。

それから、宮神輿の後は、屋台、ヤッサと言うのですけれども、でかいですよ。これが町神輿なんです。お金をふんだんに使ったでかい屋台に4人の乗子のりこを乗せて、練り歩くのです。神輿の担ぎ棒の上には長老さんが乗っています。神輿差しをやっています。これも100人か200人、すごい人数です。感動しました。本当は練り場は立ち入り禁止なんですけれども、私は降りて写しました。大変な熱気です。

これは泥まわしうでまも、そして腕守りです。これはお守りなんです。そういうものを持っています。私は「禪ふんどししている」と書いたら、若い方から違うと投書がありまして、それで「ふんどし談義」という作品が始まったのですけれども、結局は、交通規制図の中に、「飲酒運転、免許証不携帯（特に裸フンドシ姿）の運転は絶対にしないで下さい」と書いてありまして、これで禪であるということがわかったのですけれども、当たり前のことなんです。若い方はこれを禪だとは思わないみたいなんです。ここでは「まわし」や「泥まわし」と呼んでいます。

地元の友人から私の名前が入った腕守りをいただきました。非常に感動しております。最後は、こういうふうにならぬに4町が並びまして順番に御旅所に行くのです。

裸祭をやろうと思ったのは、これを見て、命懸けでやっているし、すごい盛り上がりがありまして、京都の色々なお祭も楽しいのだけれども、やはり男たちが命懸けでやるというのが裸祭なんじゃないか、その感動が素晴らしいということで裸祭のシリーズを始めました。実はやっている方は余りいらっしやらないのです。だから、裸祭90何件を発売していますけれども、これも日本一です。誰もやってないから人気があって、必ず待っている方がいらして、発売すると10倍くらいのアクセスがあって、あっという間に1万件、2万件になります。

わかみやほちまん
《若宮八幡はだか祭/大分・豊後高田》

これは大分の若宮八幡の裸祭です。たった1基の宮神輿なんですけれども、川を渡っていくということで、清原浩さんが来てくれということで、取材に行ったのです。最初は私が撮りましたけれども、翌年からは清原さんが撮って、どんどん送ってくれます。氏子たちは夜こういうふうに入川して神と戯れます。東京では担ぎ棒に乗ってはいけないと言われてはいますが、ここではこだわりません。とにかく戯れ、あちこちで盛り上がっています。激しければ激しいほど神様が喜ばれるのです。こんなびしょ濡れになってもみんな必死になっている。1年中神社におられる神様を慰めるために、ポータブル・シュライン（神輿）にお乗り頂いて御旅所に運び、一緒に楽しむというのがお祭ですからこうなるのですね。

あれみこし
《大和田の荒神輿/埼玉・新座》

これは「はっちゃん」という方に紹介されて行ったお祭です。あれみこし荒神輿と言いますが、すごいですね。こういうふうにはねたり、とにかく必死ですよ。汗びしょびしょで、倒れるくらいきついです。きつくて神輿がひっくり返ったことがあります。だけれども、それくらい盛り上げるのです。美しい鎮守の森の中で、1基しかないのですけれども、お祭が毎年行われる。これは感動しました。素晴らしい祭です。

それで、「はっちゃん」、この方も素晴らしくて、12年間に231作です。すごいですね。写真とレポートがずっとありまして、このレポートを見て私も取材に行ったりして、これも有名なサイトです。

《大原はだか祭/千葉・いすみ》

大原の裸祭。これは、裸だと思ったら、上半身だけで、下は股引なんですけれども、これもすごいですね。海に入って揉み上げるんです。こうやって放り上げちゃうんですよ。かなり距離上げます。これを競うわけなんですけれども、神様が乗っているのにそんなに乱暴にしてはいけないのじゃないかと東京の方は言うかもしれませんけれども、乱暴なほどいいんじゃないでしょうか。

《江ノ島寒中神輿錬成会・江ノ島天王祭/神奈川・藤沢》

江ノ島の寒中神輿です。これは何と担ぎ棒に乗っていますよ。新成人の方が乗るので、そして、海に出て練るのですけれども、このときだけは色柄の禪がOKなんです。えのしまじんじや江島神社の宮司がOKしているのです。神輿の上に乗ってもOK、盛り上がっていますね。非常に美しい。こういうふうカラフルな禪を締めて全国から集まってくる。

夏になると天王祭ということで、同じ江島神社なんですけれども、白禪だけです。びやっこん神聖な祭だということで白に統一。色柄物は認められません。冬と夏で、同じ神社でも考え方が変わっています。

こんなに深く、溺れそうになっています。深みにはまってしまってアップアップしている方がいました（笑声）。この人なんか頭しか出てないですけれども、ここまで入ったりして本当にすごいお祭です。

最後は塩抜きでシャワーです。見て下さい、更衣室なんてありませんから、みんな公園で禪外して着替えているわけなんですけれども、結局、今も銭湯ですから、別に恥ずかし

くもないですね。本当にオープンといいますか、裸天国、それが日本なんだろうなと思いました。

午後は御旅所に行くのですね。小動神社こゆるぎまで行きます。江ノ電が通るたびに神輿が待避するのです（笑声）。それが通ってからまた進むという面白い祭でした。

《黒石寺蘇民祭/岩手・奥州》

これが江戸扇えどおうぎの山本啓一さんのグループで、黒石寺こくせきじの例の蘇民祭そみんさいで取材させていただきました。徹夜の取材でした。こういうふうな裸祭なのですが、最後は蘇民袋争奪戦となり、親方が蘇民袋を切るのですけれども、親方は全裸なんです。これを岩手県警が公然猥褻物陳列罪こうぜんわいせつぶつちんれつざいに当たると指摘し、それに対して渡海文部科学大臣が不快感を示して、警察権力の介入を批判したということで話題になりました。

この騒動は昨年で、マスコミが蘇民祭の取材に黒石寺に押し寄せて大騒ぎとなりましたが、蘇民祭は粛々とそのまま斎行されました。今年蘇民祭に行かれた方がいたので、これは今年の写真です。下半身が見えないように下から親方を持ち上げて蘇民袋を切っています。だけれども、全裸ですよ。見えませんがね。地元の方々や有識者たちは伝統文化にこだわっています。何百年も続いているお祭で、しかも堂内ですからね。公道を歩いているわけではありませんし、警察が介入するというのは、ちょっと信じられないことでした。

この黒石寺の住職（女性）とはそれ以来文通しており、私のサイトを黒石寺の公式サイトにリンクしてもらっています。黒石寺蘇民祭といえば「Wa☆Daフォトギャラリー」が定番となっていますので、警察の介入騒ぎのときにみんなが一斉にアクセスしたために、セクハラポスター騒ぎのときと同じように、私のホームページがパンクして、しばらくアクセスできなくなって大変な目に遭いました。

《國府宮はだか祭/愛知・稲沢》

國府宮こうのみやの裸祭もすごいです。今日は、福袋に全部この写真の儼追布なおいきれが入っています。有効期限は今年中ですので、厄除けになっていますから、皆さんお持ち帰りいただければと思います。こういうふうなおいざさに儼追笹なおいざさを奉納しますが、禪一丁の裸の方が8,000人ですよ。観衆が13万人。最後にどうするかというと、神男しんおとこというのがいます。素っ裸なんですけれども、これを触るのですよ。触ると厄は全部その神男に移ってしまうということで、厄落としになるもの所以大家タッチしようと思って群がるのです。だから肌と肌がこすれて火傷やけどします。それで、手桶隊ておけたいというのがありまして、水をリレーで掛けている。それでこの神男は死にそうなんです。最後は、救出隊かみまもりが神守かみまもりといいまして、神男がゴールしたら、渦の中に飛び込んで助け出します。見て下さい、必死ですが、神男は素っ裸です。全部剃ってあるのです。毛があると怪我するのですよ。だから、頭からあちらも全部剃っています。それでないと危ないということで、もう失神しそうになって、救出された後は布団に入って休むのです。それくらいすごいお祭です。なお、愛知県警は神男の全裸にクレームを付けたことはありません。

《神の島の祭/福岡・宗像^{むなかた}》

これは大庭靖雄さんが撮られたもので、これも貴重です。参加されたのですから、大庭さんも素っ裸で褌されたはずなんですけれども、沖ノ島の祭、女人禁制で、女性は上がれないのですけれども、これも褌は素っ裸です。

それから、国東^{くにさき}の祭もそうです。要するに、裸というのは当たり前で恥ずかしくないわけです。しかも禪していたら濡れてしまいますので、脱げばまたすぐ着られるということもあるようです。

【参考】日本の伝統的な宗教行事の一部に全裸が散見されますが、これらの行為は、刑法上、著しく公序良俗に反しない限り、信仰、伝統、慣習、正当業務行為などに当たるものとして、違法性が阻却されると考えられます。/和田義男説

《加賀禿裸放水/石川・金沢^{かがとび}》

これは加賀禿^{かがとび}の裸放水で、全身ずぶ濡れになって撮りました。これほどの写真は絶対に撮れません。このとき現場には私とNHKのカメラマンしかいません。みんな遠くのテントの下で見ているだけなんです。上から落ちてくる滝のような雨の中で撮ったのですけれども、これは私の最高傑作です。

《七日堂裸詣り/福島・柳津^{なのかどう やないづ}》

それから、これも全紙で焼いていますけれども、今日は差し上げますが、長谷川昇司さんの案内で、七日堂^{なのかどう}の裸祭に行っていました。これも素晴らしい祭です。

《鐵砲洲寒中水浴大会/東京・鐵砲洲》

それから、鐵砲洲、時間が来ていますけれども、これは、三木芳樹さんに誘われて、5年間5回行きました。ずっと正月に前の宮司さんがやっておられたのです。北海道にも行かれて、正月に褌をするということです。これは2006年です。「メトロ」にも載りました。この2回目に行った後、私は弥生会の会友になりました。それ以来ずっとお付き合いさせていただいています。

勘九郎さんが勘三郎を襲名されるときに神輿を担いでいます。まさに鐵砲洲は、歌舞伎座なんです。だから、他の神輿は入れません。素晴らしいところです。

これは2007年の寒中水浴です。私は表舞台だけではなくて、舞台裏までカメラを入れる、そういったことを主義にしていますので、こういう禪を締めている写真は、今まで撮られたことはなく、公開されなかったのです。これは石川さんですけれども、風呂場まで行っています。世界中の人が「Wa☆Daフォトギャラリー」を見ているのですが、罪になるような写真はひとつもありません。(笑声) 裸は日本の文化だと思います。

これは2008年、私が還暦(60歳)で、遂に寒中水浴、しかも赤禪^{あかふん}です。(笑声) 本当は駄目だと言われたのですが、宮司の特別許可を得ました。三木芳樹さん、平野五雄さん、私の3人が還暦だったのです。今まで撮すばかりだったのですが、参加したくなり、とうとう裸になりました。

これは今年で、星さんが撮したものです。私は入っていますから撮せませんので…。(笑声) こんなに観客が多いのです。すごい人気になっています。関東一です。

今年^{あじやり}は高野山の阿闍梨、お坊さんが入ったのです。滝行の取材のときに知り合った方で、声をかけたら来られた小林宗峰さんという方です。それから、絵地図画家の久芳勝也^{くば}さんも一緒に水浴されました。この方がそうです。

《武蔵御嶽山滝行/東京・青梅》
むさしみたけさんたきぎょう

今日、最長老の羽場左近さん（75 歳）が来られています。武蔵御嶽山の綾広の滝の前でポーズを取って頂いて撮らせていただきましたけれども、ずっと滝行を続けておられる。来年の鐵砲洲の寒中水浴はぜひ参加されるというふうに聞いております。

《山伏寒中滝行/新潟・南魚沼》

それから、寒中の滝行、これは里山伏^{さとやまぶし}ということで、新潟まで行ってまいりまして、これもすごいです。雪の中ですから、もう気合いです。とても真似できないと思います。

相撲の話とか色々あるのですけれども、時間が来てしまいましたので、この辺で端折って、もし興味のある方はCDを持って帰っていただいて、ご自宅で続きを見ていただければと思います。

《結び》

「世界の旅」「日本の祭」と話してきましたが、大事なことは遊び心です。「好きこそ物の上手なれ^{じょうず}」とか、「下手の横好き^{へた}」とかありますけれども、どちらでもいいです。要は、野次馬根性と根気、気力体力です。健康、これさえあれば楽しく遊べる。

日本は世界一の長寿社会で、日本人が持つ優れた遊び心は、経済を活性化する妙薬です。高齢化社会では遊び人が主役だというのが私の意見でございまして、これからも一緒に遊びましょうということで終わることにしたいと思います。どうもご清聴、ありがとうございました。（拍手）

〈 完 〉

最終改訂版 2009.7.31